一九三〇年代における瞿秋白の知識人アイデンティティの變容

白井澄世

はじめに

一九三一年、瞿秋白は中國共産黨第六期四中全會において、王明ら留ソ派より「調停派」として批判を受け、政治の中樞から失脚した。その後、彼は政治を離れて左翼作家連盟に加わり、マルクス主義文藝理論家として多くの論爭に積極的に參加する一方、文壇のリーダーであった魯迅と深い親交を結び、中國文學史上初の本格的な魯迅評論『魯迅雜感選集』序言」を著した。この時期は、彼の文學者として本領が發揮された時期であった。

だが一九三四年、彼は黨命により上海を出て瑞金に赴き、江蘇ソビエト區の仕事に就いた。つまり文學者としての生活を捨て、再び政治に關わっていったのである。翌年、長征に參加できなかった彼は國民黨の圍剿から逃れて南方へ脱出する途上、國民黨に捕らえられて處刑された。三六歳だった。

瞿秋白の處刑が世間に知れると、中國共産黨は彼を英雄的な革命家として稱えたが、彼が處刑直前に書いた『多餘的話』がメディアに流れると、中國共産黨の裏切り者だという評價が起こり始めた。[1] その理由は、瞿秋白が『多餘的話』の中で、自分は本來文學者として生きたかったが、「歴史の誤解」によって革命家として生きざるを得なかった、だがそれは失敗に終わり、結局は中途半端な「文人」でしかなかった、中國共産黨の指導者としては失格であったという自己認識を述べていたからである。[2] だが『多餘的話』は政治的な狀況によって様々な解釋が付され、瞿秋白の評價も搖れてきたように、この書を裏切り者の書と見なすのは難しい。[3] 現にこの十餘年、テクストの複雜な構造の解明を試みる研究が現れている。[4] いずれにせよこのテクストにおいて、革命家と文學者―政治と文學における瞿秋白の自己認識が複雜に絡み合っていると思われる。

本稿では、政治家として失脚しながら再び政治にかかわり、革命家として刑死しながら、失敗した革命家として自己を告白する瞿秋白の特異な自己認識に注目したい。彼は政治と文學をどのように捉えていたのか。とりわけ三〇年代前半、つまり四中全會の政治的失脚から江蘇ソビエト區行きまでの期間、革命家と文學者とはどのように捉えられていたのかを、瞿秋白の知識人としての自己認識（知識人アイデンティティ）の變容という觀點から檢討したい。

一、瞿秋白のアイデンティティと「市儈」

（一）一九二〇年代の知識人アイデンティティと「市儈」

最初に、本論の前提として、一九二〇年代における瞿秋白の知識人アイデンティティを確認しておきたい。

瞿秋白は一八九九年、文人一族の家に生まれたが、清朝の崩壊によって沒落し、貧困のうちに育った。幼い頃は四書五經を讀んだが、科擧廢止に伴い、新しい教育制度を受けて育った。この世代は、傳統的な價値觀と新しい價値觀が交錯する時代に育った世代であり、彼は自分を傳統的な中國文化と新しく流入した西歐文化の混合物である、時代轉換期の「餘計者（原文:多餘的人）」であると認識していた。[5] やがて五四運動が起きると、社會變革の希望に燃え、トルストイ主義からマルクス主義に接觸した。その中で彼は、ロシア革命は新舊・東西を融合する必然的な歷史的事件であり、いずれ中國にも革命が起こると考え、革命の中で生きる自己のアイデンティティを求めてロシアへ赴いた。[6]

だが、ロシアで彼が目にしたのは理想社會ではなく、新經濟政策（ネップ）の下、資本主義化し、成金（ネップマン）がのさばる社會だった。ロシア滯在中、心の葛藤を綴った隨筆『赤都心史』の中で、瞿秋白はネップマンを「市儈」と呼び、その出現に危機感を覺えて批判を加えている。[7]「市儈」とはロシア語のМещанин（日本語譯：小市民）で、帝政ロシアで形成された都市の小商人や職人ら小市民階級を指す（本稿における「市儈／小市民」の表記は、引用文及び瞿秋白の文脈で用いる際に「市儈」を用い、それ以外は「小市民」を用いた）。一九世紀以來、ロシア知識人・作家の主要テーマの一つは、資本主義の侵入や都市化に對するロシア民族性の擁護であり、「小市民／市儈」は資本主義を體現する俗物的な人間の象徴として、知識人の彈劾の對象となってきた。瞿秋白はネップマンを「市儈」の系譜と捉え、「市儈」發生の起源と、彼らを彈劾する新しい時代の知識人の系譜をロシア一九世紀の歷史から探していった。その「反市儈」知識人の系譜の最後に、瞿秋白が見出したのがゴーリキーであった。ゴーリキーこそ、一九〇五年第一革命の時、力を失った貴族の知識人と決別し、民衆に與した「反市儈の鬪士」であると言う。[8]

このような「反市儈」の知識人像の模索は、西歐文化・經濟が流入したために傳統的文化・經濟制度が崩壞した中國における新しい知識人像の模索、つまり彼自身の生き方の模索でもあった。例えば「家書」（『赤都心史』三二章）では、自分が屬する中國の「『士』の階級」が「歷史の遺物」になった今、「『士』が無產階級化」することにのみ將來があると述べる。[9] 續いて「我」（同三四章）では、東西の舊文化の混合物である自分は、舊東西文化である「資產階級の市儈主義」と「『東方式』の死滅」を止揚し、「人類の新文化」を創出することによって自己の新たな「個性」を創出できると述べている。[10] 瞿秋白にとって「人類の新文化」とはロシアで見出した無產階級文化であった。つまり彼は、舊來の「紳士」意識と新たに身につけた「市儈」意識を克服し—それは「餘計者」意識の克服でもあった—、新たな存在意義を得る道を、內なる東西文化の止揚＝無產階級文化の創出という理論に見いだしたといえよう。それは、やがて中國で起こるはずの無產階級文化革命に積極的に參加する革命家として生きることであり、彼はそのような新しい自己を「『新時代』の活發な幼兒」[11]になぞらえている。こうして瞿秋白は、無產階級文化革命に參與することが唯一の自己實

現の道だと認識するに到ったと言えよう。[12]

但し、このような知識人アイデンティティの獲得は、植田渥雄が「直感的に知識階級の無力と、時代變革による知識人の無産階級化を感じとり、その方向に自己を埋沒させていくという形の、いわば自己沒却への志向、ないしは自己破壞への志向というべきもの」[13]と指摘するように、自己否定的なものであった。

革命家への道を見出しつつあった瞿秋白は、一九二二年一月、モスクワで開催されたコミンテルンの極東大會に通譯として參加し、現實の政治にかかわっていった。その翌月、彼はロシアで共産黨に入黨するが、その直前、ゴーリキーの詩（「小市民讃歌」）を譯し、『赤都心史』に掲載した。[14]この詩はゴーリキーが一九〇五年第一革命の時に書いた論文「小市民層についての覺書」の中に插入された詩であり、同論文は、小市民の精神構造を批判すると同時に、人民の革命に與さない舊來の知識人たちをも批判するものであった。瞿秋白がこの詩を入黨直前に譯したのは、彼がゴーリキーに見出しつつあった「反市儈主義の鬪士」という新しい知識人の道に示唆を受け、舊時代の知識人意識（紳士意識）と決別し、中國の「市儈」と戰う新時代の革命的知識人として生きる決意の表れだったと思われる。こうして彼は革命に參與する知識人アイデンティティを確立し、政治運動に關わっていった。

（二）一九三一年の政治的失脚と「市儈」

ロシアで入黨した後、中國に戻った瞿秋白は五三〇運動などで活躍し、陳獨秀が失脚した後は黨の指導者として南昌暴動を指揮するなど、政治家として最も精彩を放っていた。だが先述したように、三一年失脚して黨中央から排除される。この失脚は人生最大の衝擊として『多餘的話』で繰り返し語られている。

ところで瞿秋白はこの失脚後の狀態を次のように述べている。「實際、四中全會の後、私は既に全くの市儈となってしまった。政治問題に對して意見を述べることを極力避け、中央の意見に從って意見し、間違っているとされれば卽座に過ちを認め、辨解したいとも思わず、日和見主義だと言われたら日和見主義でよかった。」[15]（傍點：白井。以下同）ここで言う「市儈」とは、「マルクス主義とは［…］無産階級の宇宙觀と人生觀である。それは潛在する私の紳士意識、中國式の士大夫意識、後に變質して出てきた小資産階級あるいは市儈式の意識と完全に對立する立場にあった」[16]と言うように、マルクス主義や無産階級に對する紳士・士大夫が變化した小資産階級・高等遊民であり、政治的な主體性のない「日和見主義者」を指すと思われる。錢理群は、この「市儈」の人生觀とは、「士大夫意識」と同じく利己主義・個人主義・非政治性という彼の本質を指すと述べている。[17]だが既に確認したように、「市儈」は彼が革命的知識人として自己認識する際の、切實な自己像であったはずである。ここに、「市儈」をめぐる彼の複雜なアイデンティティを見ることができるのではないか。以下、三〇年代の瞿秋白における「市儈」觀を檢討したい。

二、三〇年代文藝論爭の中の「市儈」

（一）民衆の「自己改造」と「挖心文學」

三〇年代、瞿秋白が最初に關わった論爭は文藝大衆化論爭である。彼は「普洛大衆文藝的現實問題」（『文學』第一卷第一期、一九三二年四月二五日）でこの問題に關與していった。運動における彼の最大の關心は「大衆語（普通話）」の創出にあったが、一方、大衆の自己改

造のための文學も提唱していった。

「普洛大衆文藝的現實問題」に書かれた自己改造の文學について、彼の見解をまとめると次のようになる。勞農大衆は本來、鬪爭から離れられないが、彼らは帝國資本ばかりでなく、國民黨とブルジョワジーの結合である「紳商階級」からも抑壓され、鬪爭精神を奪われ、搾取される存在になり果てている。一方、「紳商階級」に養われている文學者は、「宗法主義」と「市儈主義」によって民衆を拘束し、鬪爭から遠ざけている。この「宗法主義と市儈主義」とは利己主義的な小資産階級の幻想であり、「非政治主義」的な感情である。つまり「市儈主義」とは大きな理想を持たず、生活の問題にのみ拘泥し、努力すれば日の目を見ると考えるような勤勉さを指すが、これは支配者に從順になることであり、鬪爭に對する「不抵抗」に他ならない、と。[18]

こうして瞿秋白は、勞働者・農民讀者の搾取狀況と文學における「市儈主義」の跋扈を指摘した後、「プチ・ブルの市儈式の理想」である「奴隷の心」を「抉り出す〔挖〕」文學、つまり自己改造のための「挖心文學」を提唱し、その作品例として巴金「奴隷の心」、張天翼「二十一個」等を擧げた。[19] また、茅盾の小說『三人行』の登場人物の一人を「市儈主義」とし、その變わり身の早さや有害性を批判的に描き出すように要求している。[20] 以上、文藝大衆化論爭の中で使われた「市儈主義」とは、〈不革命であって反革命ではない〉性質を指すものであった。

（二）自由人・第三種人論爭

次に、三一年末から始まった自由人・第三種人論爭における瞿秋白の「市儈」の使い方を、彼の知識人觀という點から檢討したい。[21]

自由人論爭は、神州國光社の胡秋原が、自分は「自由人」であるので政治黨派に與さないと宣言し、政治と藝術の乖離を提唱したことから始まった。これに對して瞿秋白は左連側から、「文化革命」運動の擔い手は「自由な」知識階級ではなく大衆自身でなくてはならず、無黨無派という「自由」な立場は階級鬪爭を無化するものであり、胡秋原は統治者に擦り寄る知識人であると批判した。[22] この論爭の爭點は三つあった。一つに「文化革命」の擔い手の階級をめぐる問題、二つに運動における知識人の役割をめぐる問題、三つに政治と文學の關係の問題である。ここに「自由」という立場の解釋をめぐり、胡秋原と瞿秋白の意見が對立したのであった。

この論爭に途中で介入してきたのが左連メンバーの杜衡である。杜衡は、兩者の論爭の中で苦しんでいるのは「第三種人」＝作家であると主張した。ここから第三種人論爭が始まる。杜衡は、自由人論爭では主要點ではなかった文藝大衆化の問題を取り上げ、作家の階級性をめぐる問題を眞っ向から問うた。大衆が讀む連環畫を作ったところでトルストイやフローベールのような作家は生まれない、そもそも革命に文學は不要であると彼は述べた。これに對して瞿秋白は「どこに中國のトルストイがいるのか、母の腹から出たのか？　それは別の問題だ。これは、今中國に自分のゴーリキーがいるかどうかと同じ問題だ」と反駁し、藝術と扇動を兼ねた作品として一九〇五年以降のゴーリキーやセラフィモヴィッチの作品を例に擧げた。[23] つまり瞿秋白は、政治と文學は分離することができず、革命到來の時期において「自由」や「中立」は支配階級に與するものだと批判したのであった。

但し、兩者の問題點は完全に食い違っていた。杜衡は、非プロレタリア作家のプロレタリア化という作家の主體性を問題にしたのに對し、

この時點の瞿秋白は文學作品を問題としていたからである。[24] その後、杜衡は文學における政治の指導を否定して作家の政治性を問うなど、瞿秋白が取り上げなかった作家の自己改造の方法を正面から問うた。[25] だがここから代わりに魯迅が對應し、論點がずれたまま論爭は第二期に入り、瞿秋白は論爭から外れていった。

しかし、瞿秋白は作家の政治性という問題に答える理論を探し續けていたと思われる。論爭の終盤である三二年一二月から、彼は『高爾基論文選集』『高爾基創作選集』及び『現實—馬克斯主義文藝論文集』の翻譯に着手したが、これらは自由人・第三種人論爭の理論的決算を目指すと同時に、大衆文藝化の創作モデルを提供する意圖のもとに譯されたものであった。[26] 瞿秋白は『高爾基論文選集』「前言」で、「君〔作家—白井注〕の「中立」は客觀的に誰を助けるのか？ これらの問題は文學者が必ず答えなくてはならないものだ」[27] と問いかけているが、これは作家の階級性・政治性を問うものといえよう。注目すべきは、そのような階級性・政治性を持つ作家として、ゴーリキーの次の點が強調されていることである。

〔ゴーリキーは〕虚僞の人道主義と自由主義を暴露し、市儈の個人主義、救いがたい利己主義を攻撃する。〔略〕〔ゴーリキーは〕「資本家と勞働者の間」の中間の立場を堅持する市儈を憎惡し、裁斷する。彼はこれらの自稱「第三種の戰士」の虚僞、これらの「機械的公民」の眞相、つまり「十月」前の「機械的な革命家」を暴露する！[28]（傍點：白井付）

ここで瞿秋白は、中立を唱える自由派知識人を革命の敵として彈劾したゴーリキーについて述べているのであるが、それは中國の自由派・中間派知識人への批判でもあったと思われる。つまり中立を唱える中國知識人を「市儈」として批判したのであった。ここに作家における文學と政治（革命性）の問題が正面から取り上げられ、瞿秋白の回答が示されていると言えよう。

また、瞿秋白にとって『高爾基創作選集』の編集は、前節で述べた「挖心文學」のモデルの提供でもあった。「後記」で瞿秋白は、ゴーリキーが「市儈」や小資産階級を深く憎み、「市儈」を描いた作品の持つ「反市儈主義と集團主義」に注目せよと、讀者に對して作品の效用を說いている。[29]

こうして瞿秋白は、ゴーリキーが自由派知識人を批判し、民衆の自己改造を促す作品を提供する「反市儈」の「革命作家」であることを示すことによって、作家における政治性を示唆すると同時に、中國の「市儈」たる「非政治性」「非鬪爭性」の知識人を彈劾すべき對象として明確にしたと言えよう。

（三）「『魯迅雜感選集』序言」と「市儈」

このような經緯を經て、瞿秋白が一九三三年に執筆したのが「『魯迅雜感選集』序言」（以下「序言」）である。[30] 「序言」は瞿秋白の知識人觀の總括というにふさわしく、辛亥革命以前から三〇年代までの中國革命運動における知識人の歷史を描き出し、その中に革命的知識人の系譜として魯迅を位置づけたものであった。

内容は簡單に言えば以下の通りである。中國の革命は「民權主義の群衆革命」という一貫した運動であったが、革命の擔い手が士大夫式の知識人からブルジョワジーへ、やがて群衆へと移るにつれ、知識人

は指導者から群集の友人になった。その過程で、知識人はまず「國故派」と「歐化派」に分裂し、更に「歐化派」が「改良派」と「革命派」に分化した。現在、「改良派」は支配者に與して「歐化紳士」と「租界市儈」になったが、「革命派」は「勞働者・農民民衆の陣營」に與する革命的知識人になった。この歴史において、「士大夫」から「歐化派」へ、そして「革命派」への道を歩んできた魯迅は、封建社會・紳士階級の逆臣であり、革命家の諍友である。その魯迅の闘爭の特徴は、醒めた現實主義、粘り强い戰闘精神、反自由主義、反虚僞の精神の四點である、と。

この時、瞿秋白が魯迅をゴーリキーに重ねていたのは明らかである。「序言」冒頭で、ゴーリキーは作品の中で思想を表すだけではなく、理想のために闘い、高潔な紳士や藝術家の虚僞を暴く「革命作家」であると述べ、導入文としている。

ところで瞿秋白は、革命的知識人である魯迅を歴史的に位置づけると同時に、反・魯迅ともいえる〈不・革命的知識人〉の系譜も歴史的に形象化している。自由人・第三種人論爭において、瞿秋白はそのような知識人を、「知識階級と自任するものの、實際には何らの實際的知識も無」い「中國式の讀書人」であり、彼らは三〇年來の社會變動のために産出された「知識階級の『餘計者』」であると述べているが、[31] 彼らは「序言」において、體制に與する自由派・中閒派知識人に到る知識人の系譜として位置づけられたと言えよう。

注目すべきは、瞿秋白がそのような否定的な知識人を中國の「市儈」としており、その精神構造の特徴を述べるくだりが、彼の譯したゴーリキーの論文「市儈」（『高爾基論文選集』所收）のほぼ引き寫しであることである。（以下傍線―白井付）

瞿秋白「『魯迅雜感選集』序言」（部分）

但是死氣沈沈的市儈，―其實他們對於在自己手下討生活的人一點兒也不死氣沈沈，―表面上往往會對所謂弱者〝表同情〟，事實上他們有意的無意的總在維持着剥削制度。市儈，這是一種狹隘的淺薄的東西，它們的頭腦（如果可以說這是頭腦的話），被千百年來的現成習慣和思想圈住了，而在這個圈子里自動機似的「思想」着。家庭，私塾，學校，中西「人道主義」的文學的影響，一切所謂「法律精神」和「中庸之道」的影響，把市儈的腦筋造成了一種簡單機器，碰見什麼「新奇」的，「過激」的事情，立刻就會象留聲機似的「啊呀呀」的叫起來。〔略〕魯迅這種暴露市儈的鋭利的筆鋒，充分的表現着他的反中庸的，反自由主義的精神。[32]

（譯.傍線部のみ）市儈、これはある狹隘で淺はかなモノで、彼らの頭は（それが頭といえるのなら）千百年來の既成の習慣と思想に取り卷かれ、そしてこの中で自動機械のように「思想」している。家庭、私塾、學校や中國・西歐の「人道主義」の文學の影響、あらゆる所謂「法律精神」と「中庸の道」の影響が市儈の頭脳を一つの單純な機械に作り上げており、どんな「新奇」なもの、「過激」な事件に遭遇しても、すぐに蓄音機の如く「アイアイヤ」と叫びだす。

瞿秋白譯「市儈」（『高爾基論文選集』所收。原典はゴーリキー「小市民根性について」一九二九年）

市儈―是這麼一個東西，它被早就制定了的習慣，思想的狹小的圈子圈住了，就在這個圈子的範圍里，自動機似的思想着。家庭，學

校，教會，「人道的」文學的影響，資產階級的「法律精神」和「傳統」的一切種種的影響，在市儈的腦筋里造成了一個不很複雜的機械，象鐘表的機器，發條一樣，這種發條推動着市儈觀念的齒輪，推動着市儈要求安靜的那種吸引力。[33]

この文章の原典であるゴーリキー「小市民根性について」[34]（一九二九年）は、第一章で先述した一九〇五年「小市民層についての覺書」の小市民批判を繼承しつつ、當時の世界情勢に合わせ、階級的な視點を全面的に押し出した論文である。「序言」において、瞿秋白は「革命作家」ゴーリキーを魯迅に重ね合わせると同時に、ゴーリキーの小市民觀を援用して、中國の反・魯迅的知識人を「知識階級の『餘計者』」の系譜である「市儈」として位置づけ、批判を加えたのであった。

三、新しい知識人アイデンティティの形成

（一）一九三三年における瞿秋白批判の展開

但し、瞿秋白にとって「市儈」は彈劾すべき敵であるばかりでなく、彼自身の問題でもあったのではないだろうか。とりわけ政治的に失脚し、革命運動から乖離した彼にとって、知識人の革命參加の問題は切實であったと思われる。この問題を、三三年末に起こった中共內部の瞿秋白批判の展開と關連づけて檢討したい（これ以降、日付に注意されたい）。

一九三三年九月二二日、中共臨時中央政治局は「關於狄康（瞿秋白：白井注）同志錯誤的決定」を行い、瞿秋白批判を開始した。批判は、『鬪爭』（上海）に掲載された彼の文章が、江蘇ソ區の經濟を過小評價したため、第五次圍剿に對する群衆の士氣を弱めるという主旨であった。[35]瞿秋白はその五日後、「聲明書」を發表して自己批判したが（「我對于錯誤的認識」『鬪爭』五六期）、批判は却って擴大し、十月には『紅旗週報』（上海）の社論に名指しで「右翼日和見主義」と批判された。更に一一月、中央局機關誌『鬪爭』（江西）にこの社論が轉載されるに及び、瞿秋白批判は黨全體の問題となった。

この黨內鬪爭は、三一年四中全會での批判に續く打擊を瞿秋白に與えたと思われる。この直後の二ヶ月間、彼は全ての言論活動を止めて沈默した。ある研究者は、この打擊が瞿秋白に政治に對する失望をもたらし、『多餘的話』執筆の一因となったという見解を述べている。[36]しかし筆者が思うに、彼は不當な批判に對して無條件に自己批判し、屈服したのではなかった。[37]自己批判から約二ヶ月後の一二月十日、彼は沈默を破り、中央委員會へある文書を提出している（「給中央委員會的信—五中全會召開的意義與反左右傾向機會主義的意義」）。文書の內容は、四中全會における日和見主義と調和主義批判はその後三年間の勝利をもたらした、現在は私（瞿）のような右翼日和見主義及び左翼日和見主義に對する鬪爭が必要であり、これが今後の革命に新しい勝利をもたらすだろうという、自分に對する批判が次の勝利を導くというものであった。更に、自分は政治に直接關與することが出來ないので、「この僅かな無駄話（原文：空話）を書くことができるだけだ。（これによって）皆が問題を考える一助となることを願う」と結んでいる。[38]

この文書は、三一年の四中全會における左翼日和見主義批判と三三年當時の右翼日和見主義批判を重ねて提起しており、黨の矛盾した批判に對する瞿秋白の皮肉めいた反論と讀めないこともない。だが、革命運動に參加できない彼が自分を素材として差し出して革命に關わろ

うとする、自己否定的な姿勢を讀み取ることもできるのではないか。〈無駄な〉言葉を敢えて述べるという行爲に、瞿秋白の形を變えた能動性を窺うことができよう。

筆者が思うに、この文書は彼の精神的葛藤の果てに出されたのではないだろうか。その葛藤のありようを、彼が「聲明書」執筆の翌日（九月二八日）に書いたエッセイ「『兒時』（譯：幼兒の頃）」と、黨宛の文書を出す直前に行ったゴーリキー詩の再譯から檢討したい。

（二）「『兒時』」の生命意識

エッセイ「『兒時』」は、瞿秋白が「聲明書」發表の翌日に執筆し（九月二八日）、魯迅の筆名「子明」[39]で『申報・自由談』一二月一五日に掲載された。なお、魯迅は一二月一二日に原稿を『申報・自由談』編集者・黎烈文に送っている。[40] このエッセイは瞿秋白と魯迅が合作した雜文の中の一編であるが、[41] 執筆から發表までに二ヶ月半の空白があることや、合作の雜文の中で唯一魯迅が手を加えていないことなど、他の雜文と異なる點が多い。[42]

丁景唐は、瞿秋白はこのエッセイを發表するつもりではなかったが、中央から瑞金行きを指令されたので魯迅に發表を賴んだのではないかと推測している。[43] しかし筆者の調査によると、瞿秋白の瑞金行きが決定したのは一二月末であり、魯迅が黎烈文に原稿を送った日より半月も後のことであった。[44] つまり瞿秋白がエッセイの發表を決めたのは政治的な理由からではなく、彼の內的な變化によるものと考えられる。まずはエッセイの內容を檢討してみたい。全文を付す。

生命を賭けるものが無い人にとって、青年時代と「兒時」は格別に大切である。このようなロマンチックな追憶は實際、「兒時」の本當の素晴らしさを發見したのではなく、「中年」以降の衰退を感じているのだ。本來、生命は一つきりであり、誰にとっても大切である。しかし、その生命が大衆の中に溶け込み、日々世界のために何か行うのであれば、彼は常に大きく生長し、老衰病死はやはり避けられないとしても、その事業—大衆の事業は死なず、「永遠の青年」を體得することができる。しかし「浮生夢の如き」人はこの世界から奪い取るものが多く、この世界に與えるものが少ない—彼は必ずやいつか疲れを感じて死んでしまう。つまり奪い取る力すら無くなるのである。老衰と、いかんともしがたい悲哀は鉛のように重く彼の心を押しつける。青春は何と短いのだろう！／「兒時」の素晴らしさとは無知である。あの頃、全てのものは「知」であり、君は毎日大科學者や哲學者になることができ、毎日、何かしら新しい事實、新しい眞理を發見した。現在はどうだろう？　「何」もかも既に知ってしまい、詳しくなり、どの人の顏もとうに見飽きてしまった。宇宙と社會はこんなにも古くさく、面白みがない。實際、それらは「兒時」よりもずっと生き生きとしているというのに！そこで私は「兒時」を思い、「兒時」に祈りを捧げる。／前進できない時、數歩下がって、既に歩いてきたもとの道に戻りたいと願う。「無知」が戻り、私に知の樂しみを與えてほしい。怖ろしい、この生命の「停止」が。／過ぎ去ったものは結局は過ぎ去り、未だ來ないものはやはり未だ來ない。一體、何に感慨を覺えるのか—私は自己に問う。一九三三，九，二八。[45]

ある研究者はこのエッセイを「優秀な共産黨員の生命觀の自然な現れ」だと高く評している。[46] だが筆者が思うに、ここに現れているのは、これまでの人生における生き甲斐の喪失に對する悲しみと現在の空虛感、そして今後の人生への問いかけであり、その深い內省において感じられる生命意識であろう。

これまでにも瞿秋白は自己模索の深い內省の時、生命を意識した表現を用いてきた。[47] また一九二〇年代、彼は革命家として生きる新しい自己を「『新時代』の活發な幼兒」になぞらえている。つまり彼にとって「生命」とは、革命の中に生きる自己の存在意義そのものであった。故に、このエッセイは幼い頃の回顧ではなく、過去と未來の狹間における自己自身への問いかけであろう。[48]

そのような語り手の前には二つの時間が現れている。「青年時代—中年」と「『兒時』—中年」であり、兩者は二つの青年像に對應している。前者は世界に貢獻することなく悲哀と無能のうちに死んでいく「浮生夢の如き」青年であり、後者は大衆と一體化することにより「永遠の生命」を獲得する青年である。だが語り手は前者に近い。そこで次に「知」への志向が語られるのである。

ところで、瞿秋白は五四期の人生觀の形成期、「無知」から「知」への流れを必然とし、科學的認識によって歷史の法則を發見し、「知(智)」の裁決によって「歷史の創出」に參與しようとしたが、それは革命家として生きることであった。[49] このエッセイにおける「無知」と「知」の希求はそれを踏襲した、革命家として生きるエネルギーの希求の表れではないだろうか。彼はいう、「「無知」が戻り、私に知の樂しみを與えてほしい」と。彼にとって「知」の希求が不可能であれば、それは「生命の停止」、つまり死を意味する。それは實際の死ではなく、存在意義を持たぬ「浮生夢の如き」人生であろう。つまり、ここにおいて彼は革命家として生きるか否かの岐路—アイデンティティの危機に直面しているのではないだろうか。彼は言う、「過ぎ去ったものは結局は過ぎ去り、未だ來ないものはやはり未だ來ない(原文:過去的始終過去了,未來的還是未來)」。時間が停止した狀態において他者は消え、對話の相手は「自己」のみである。孤獨と不安の中、彼は激しい內省に迫られていると言えよう。

だが、瞿秋白はこの危機を脫し、新しいアイデンティティを獲得し、外へ向かう契機を求めていたと思われる。その過程をゴーリキー詩の翻譯から見てみたい。

(三)「市儈頌(小市民讃歌)」再譯をめぐって—ゴーリキー像の變容

瞿秋白は「『兒時』」が發表される數日前の一二月一日、ゴーリキーの詩を翻譯したが(「市儈頌」)、それは一九二二年、共產黨入黨直前に譯した詩と同じ詩であった。彼はソビエト區に行く直前の三四年初頭、魯迅をひっそりと訪れ、翻譯した詩を個人的に託したと思われる。魯迅は最初、この詩を『譯文』創刊號に發表し(三四年九月)、瞿秋白の死後(三五年十月)、『海上述林』下卷の冒頭に掲載した。魯迅がこの詩を二度も公表し、しかも瞿秋白の死を偲んで編纂した『海上述林』に掲載したのは、魯迅がこの詩に特別な想いを抱いていたと同時に、瞿秋白におけるこの詩の重要性を知っていたためと思われる。まずは詩を見てみたい。一九二二年譯と原文の日本語譯を合わせて掲載する。

〔三三年譯〕不要追求,不要議論,／尋找的是瘋狂,講理的是蠢

笨。／晚上的夢好醫治白天的傷痕，／而明天要來的，讓它來就成。／活着—就得會過活：／驚慌，悲哀和快樂。／願意些什麼？　後悔些什麼？／活過了一天—阿彌陀佛！／一九〇五，《新生活報》，《關於市儈》。／一九三三，十二，二，譯。[50]

〔二二年譯〕不用論斷，／不用操心；／無知的尋求，／愚昧的評論。／日閒之傷，／講以夢治；／明日之日，／自然能至。／生活，生活，／萬千經受，／哀矣，樂矣，／寵辱時有。／何所願望？／何爲憂怫？／〝日既夕矣〟，／阿彌陀佛！（傍線：白井付）

〔ロシア語原文の日本語譯〕議論は止さっしゃれ、くよくよしやるな、／氣狂いが告訴して、馬鹿めがさばく。／晝まの手傷は夢のうちに癒しやれ、／あしたはあしたの風が吹く。／生きてくためには—すべてを我慢しやれ、／悲しみ、喜び、心配ごとをも。／何をば欲しがり？　何をば悲しむ？／その日が過ごせりゃ—御の字さまよ……。[52]

第一章でも述べたように、この詩はゴーリキーが一九〇五年、革命を抑壓する小市民と知識人を批判した論文「小市民層についての覺書」に挿入された詩である。一九二二年、瞿秋白はゴーリキーの「市儈」觀を受け入れ、「反市儈の鬪士」として革命に參與する知識人となるため、入黨前にこの詩を譯したのであった。二二年の翻譯が革命家への轉機であったのと同樣、三三年の革命家アイデンティティ喪失時におけるゴーリキー詩の翻譯は偶然ではないと思われる。彼はこの詩の翻譯によって何を乘り越えようとしたのだろうか。

その解答を、詩の異同と、瞿秋白が詩の翻譯の直前に執筆した、カウン著・鄒韜奮譯『革命文豪高爾基』[53]に對する二編の書評「關於高爾基的書—讀鄒韜奮編譯的《革命文豪高爾基》」「『非政治化的』高爾基—讀《革命文豪高爾基》二」から檢討したい。

最初に、書評から瞿秋白の最終的なゴーリキー觀を見てみたい（一九三三年一一月執筆）。

傳記の中でカウンは、ゴーリキーが一九一七年にボルシェビキと對立し、革命から離れた時期の仕事を、「非政治的」活動であると書いている。[54]瞿秋白はそれに對し、この時期ゴーリキーが群衆から離れ、革命に對して動搖したのは確かだが、コミンテルン雜誌の編集などは全て重大な政治的意義があったと反論し、次の二點を付け加えてゴーリキーの政治性を强調した。一つに、ゴーリキーがボルシェビキとの論爭を過ちとして認め、その結果「寄生蟲と空談家の自由に反對」[55]するようになったこと、二つに、ゴーリキーが一九一七年以降の革命の中で自己改造し、その結果『クリム・サムギンの生涯』（以下『サムギン』）を執筆したことである。

ところで瞿秋白は書評の中で、『サムギン』は單なる文學作品ではなく、群集にとって貴重な「精神的食糧」であり、ゴーリキーは「反革命」という過ちを認めて自己改造することによって、群集に貢獻する偉大な作品を執筆したという點を强調している。つまり瞿秋白はここで、文學作品の革命性と革命における作家の政治性の問題を、ゴーリキーとその作品において論じたのであった（それは文藝大衆化論爭の論點でもあった）。

ロシア文學者ビャーリクは、「小市民根性に燒印を押しているゴーリキーの多くの形象は、サムギンをその頂點として」おり、ゴーリキー

の一連の社會評論における「小市民」は全て「サムギン氣質」を書いたものであると指摘する。[56] ビャーリクが指摘するゴーリキーの一連の論文こそ、「『魯迅雜感選集』序言」で部分的に引用した論文「小市民根性について」を含む、瞿秋白が譯した『高爾基論文選集』であった。

ここにおいて、かつての「反市儈主義の鬪士」ゴーリキーは、過ちを改めて「自分の武器を磨いた」[57]（作品執筆を指す）「革命作家」となって、再び瞿秋白の前に現れたと言えよう。但し、「反市儈主義の鬪士」から「作家」への變化は、瞿秋白にとって政治から文學への移行ではなく、形を變えた鬪爭として受け入れられたと思われる。彼がカウンの「非政治的」という言葉を批判した理由もここにあるのではないか。これは三〇年代を通じて瞿秋白が主張してきた政治と文學との關係を端的に表している。つまり彼にとって、文學の實踐そのものが政治―革命の實踐だと意識されていたのではないか。

この書評は、中共中央による瞿秋白批判が全ソ區に擴大し、瞿秋白が沈默していた二ヶ月の間に書かれたものである（三三年一一月）。このとき彼は、黨からの批判、群衆からの乖離という點において、一九一七年のゴーリキーと近いところにいた。三〇年代を通じて追求してきた「革命作家」ゴーリキーは、瞿秋白において最も切實な知識人像と意識されたのではないだろうか。革命から乖離したゴーリキーが〈不革命分子〉である否定的形象・小市民サムギンを書くことによって使命を遂行したと瞿秋白が述べる時、彼もまた、文學の實踐によって革命に參與する道を見出しつつあったのではないだろうか。

但し、瞿秋白が變容したゴーリキー像を受け入れ、「革命作家」になろうとしたと言うことはできない。むしろ彼にとってより切實だったのは、自分が革命運動から乖離して「知識階級の『餘計者』」である「市儈」になり、自己の存在意義を喪失することへの恐れだったのではないだろうか。

詩の翻譯はここにおいて行われたと思われる。ここで、二二年と三三年の詩の翻譯の異同を檢討したい。

第一の異同は、文語から白話への變化である。二二年は文語で譯され、原作者の名が付されず、あたかも瞿秋白自身の詩であるかのように『赤都心史』にひっそりと掲載された。それは翻譯が彼の個人的な行爲だったからだと思われる。一方、三三年は白話で翻譯し、更に原作ゴーリキーと明記した上に、次のような注釋を付けている。「ゴーリキーは後に全く詩を作らなかった。この短い諷刺詩である「小市民贊歌」は『小市民層についての覺書』に插入されたものであり、また十月革命の前に作られ、一九〇五年『新生活報』に掲載された[58]」。つまり彼は、この詩が一九〇五年の革命時に「市儈」を批判したゴーリキーの詩として廣く讀者に讀まれることを期待して、白話で翻譯したのだと言えよう。

第二の異同は、三三年の譯には、二二年の譯にあった「知」の表現が消えていることである（引用下線部）[59]。先述したように、瞿秋白にとって「知」とは自己の存在意義を求める際に働く理智であり、彼個人の人生に關わるものであった。だが三三年の翻譯は原文に忠實な譯である。これは第一の異同と同じく、瞿秋白がゴーリキーの「市儈」批判を忠實に讀者に屆けることを意識してのことと思われる。

以上、二點の異同はともに、瞿秋白が詩を個人的なものとしてではなく讀者に向かって發したものであり、詩に對するスタンスが二二年とは逆であることを示していると言えよう。

ここにおいて、瞿秋白は二つの意味を持つ行爲として詩を翻譯した

のではないか。一つは、ゴーリキーの「市儈」觀を自己批判的に受け入れることにより、自らの〈市儈性〉を克服すること、二つに、それを「讀者」に發することによって革命に參與しようとすることである。言い換えれば、彼は「革命作家」ゴーリキーに示唆を受けつつ、自己の不革命性（市儈性）を群衆の食糧として捧げる道、自らの〈市儈性〉を群衆に對して「告白」することが革命に與する唯一の能動的實踐になるという道を見出したのではないだろうか。それは、彼が一九二〇年代から持ち續けていた自己否定の志向を持つ自己變革の表れであり、「反市儈主義の鬪士」である革命的知識人の使命遂行という自覺、つまり知識人アイデンティティの確立へとつながるものであったと思われる。つまり、ゴーリキー詩の翻譯は、アイデンティティの危機に陷った彼が新たな知識人アイデンティティを獲得し、能動的な「言葉」を手に入れ、政治に向かう決意を得るための一過程だったと言えよう。こうして瞿秋白は再び政治に向かい、「無駄話（原文：空話）」（前出）を發し、革命家として旅立ったのであった。

終わりに

以上、三〇年代における瞿秋白の知識人アイデンティティの變容を、ゴーリキー詩の再譯をめぐる過程において檢討した。簡潔に述べれば、二〇年代における瞿秋白の知識人アイデンティティは、「反市儈」として民衆に與し、現實の革命運動に參與する革命的知識人であったが、三〇年代には「言葉」という戰鬪方法を持つ革命的知識人となったといえるのではないか。そして兩者が戰鬪性という點において結びつく時、瞿秋白における政治と文學の關係も明確になると思われる。つまり彼は、語ること（文學）こそが革命の實踐（政治）であると捉えたのではないだろうか。この新しい戰鬪方法と革命的知識人觀の獲得こそ、『多餘的話』執筆へとつながるものと思われるが、それは次の課題としたい。

注

（1）最初に掲載されたのは國民黨系の機關紙『逸經』二六～二七期（一九三七年三～四月）である。

（2）「多餘的話」『瞿秋白文集政治理論編』第七卷、人民出版社、一九八九年。以下「多餘的話」の引用は同書に據り出典記載を略す。テクストの校勘については劉福勤『心憂書〈多餘的話〉』（上海社會科學院出版社、一九九三年）を參考にした。

（3）八〇年代初頭までの評價については野澤俊敬「瞿秋白の『多餘的話』についての覺書」（『言語文化部紀要』四號、一九八三年）を參照。それ以降は次注を參照のこと。

（4）例えば井口晃「『餘計な事』を讀む—轉向、瞿秋白の場合—」（『文學』四四卷四號、一九七六年）はテクストに創作意識が見られることを指摘し、鈴木將久「餘計なことば—瞿秋白『多餘的話』における「語ること」と「演じること」」（『中國哲學研究』一三、一九九九年）はコミュニケーション論の立場からテクストの構造について指摘する。錢理郡『豐富的痛苦：「堂吉訶德」與「哈姆雷特」的東移』第十章（時代文藝出版社、一九九三年）は「多餘的話」をルソー『懺悔錄』になぞらえ、中國知識人の精神の眞實の記錄であると評價した。

（5）『赤都心史』「中國之『多餘的人』」では、自分を「歐華文化衝突的犧牲」として自己の分裂した意識を述べている。『瞿秋白文集文學編』第一卷、人民文學出版社、一九八五年、二一九頁。以下、『瞿秋白文集文學編』からの引用は全て同文集に據り、出版社・出版年の記載を略す。

(6) 五四期の瞿秋白の經歷及び思想形成については以下に詳しい。陳鐵健『從書生到領袖—瞿秋白』(上海人民出版社、一九九五年)、松浦恆雄「五四時代の瞿秋白」(『未名』五號、一九八五年)、姫田光義「瞿秋白について」(野澤豊編『中國國民革命史の研究』、青木書店、一九七四年)。また拙稿「五四期におけるベルクソン・生命主義に關する一考察—瞿秋白を中心に」(『東京大學中國語中國文學研究室紀要』第十號、二〇〇七年)も參照されたい。

(7) 例えば『赤都心史』「新資産階級」ではネップ下で繁榮する成金族の様子を書きとめ、「飢」では民衆が災害に遭っている時に成金が利益を追求する様を「市儈主義」として批判を加えている。『瞿秋白文集文學編』第一卷、一六八〜一七二頁。

(8) こうして書かれたのが『俄國文學史』である。『瞿秋白文集文學編』第二卷所收。

(9) 『赤都心史』、二一一頁。

(10) 『赤都心史』、二一三頁。

(11) 『赤都心史』、二一三頁。

(12) 拙稿「一九二〇年代における瞿秋白の「市儈」觀について—ゴーリキーとの關係を中心に」(『東京大學中國語中國文學研究室紀要』第七號、二〇〇四年)を參照。

(13) 植田渥雄「瞿秋白の知識人觀」『駒澤大學外國語部論集』一期、一九七二年。

(14) 『赤都心史』「阿彌陀佛」『瞿秋白文集文學編』第一卷、二三九頁。ゴーリキーの原詩は無題であるが、ここでは便宜上「小市民讃歌」と名付けて用いた。

(15) 「多餘的話」、七〇三頁。

(16) 「多餘的話」、七〇一〜七〇二頁。

(17) 錢理群、注四前掲論文。

(18) このような瞿の階級意識については姫田光義「『亂彈』に現れたる瞿秋白の時局觀」(注六前掲書『中國國民革命史の研究』所收)が詳しく論じている。

(19) 「財神還是反財神?」『瞿秋白文集文學編』第一卷、四〇九〜四一一頁。

(20) 「談談『三人行』」『現代』創刊號、一九三二年五月。

(21) 自由人・第三種人論爭は當時の文壇の編成やヘゲモニー爭い、左連內部の人閒關係が絡んで複雜な様相を呈しているが、ここでは文壇事情に觸れず、瞿秋白の用語の使い方に限って檢討した。論爭については以下の文獻を主に參考にした。竹內實「〝第三種人〟をめぐる論爭」『東洋文化』四一期、一九六六年、前田利昭「「第三種人」論爭における馮雪峰—および「中閒派」文學者をめぐって—」『東洋文化』五六、一九七六年、藤澤太郎「一九三〇年代上海文壇における作家の「連合」をめぐって」『中國研究月報』六四一號、二〇〇一年。

(22) 「財神還是反財神?」「「自由人」的文化運動」(『瞿秋白文集文學編』第一卷所收)、「〝五四〟和新的文化革命」(『瞿秋白文集文學編』第三卷所收)。

(23) 「文藝的自由和文學家的不自由」『瞿秋白文集文學編』第三卷、五五〜七四頁。

(24) 例えば杜衡は、作家が眞實を描けば矛盾が暴かれ解決の方法を見いだすことができると述べており、論點が瞿と食い違っている。杜衡「〝第三種人〟的出路」『現代』一卷六期、一九三二年十月一日。

(25) 「論文學上的干涉主義」『現代』二卷一期、一九三二年一一月。

(26) 丸尾常喜「「魯迅雜感選集序言」の理論的前提」(『東洋文化』五六、一九七六年)は、「これらの仕事(注:ゴーリキーの著作の翻譯やマルクス主義文藝論文集の翻譯等)は、左連の文藝理論の確立を目標にしつつ、一方で「自由人」「第三種人」をめぐる論爭の理論的決算を目指すものであった」と指摘している。なお『高爾基創作選集』及び『現實』

は、瞿秋白がソ連滞在中の曹靖華に依頼し、魯迅を介して送ってもらったもの。新島淳良「瞿秋白の文學論の特徴―「魯迅雜感選集序言」を中心に―」(『近代中國の思想と文學』大安、一九六七年)を參照。

(27)『瞿秋白文集文學篇』第五卷、三二四頁。

(28)前注同、三二五頁。

(29)前注同、三二五頁。

(30)丸尾常喜(注二六前掲論文)は、「序言」を左連前期における文藝大衆化理論の到達點の一つとして論じている。「序言」について主に參考にしたものを以下に擧げる。楊之華「『〈魯迅雜感選集〉序言』是怎樣生産的」『俄語教學』八期、一九五四年、平松守「魯迅雜感選集序言の誕生まで」『野草』一三號、一九七三年、新島淳良注二六前掲論文、今村與志雄「中國における魯迅評價の變遷」『魯迅案內』岩波書店、一九五六年、吳奔星「重讀瞿秋白《魯迅雜感選集序言》」・陳遼「《〈魯迅雜感選集〉序言》新解」『瞿秋白研究文集』所收(中共黨史資料出版社)、一九八七年。

(31)「小諸葛」『瞿秋白文集文學編』第一卷、四二四～四二六頁。

(32)『瞿秋白文集文學編』第三卷、一一九頁。

(33)『瞿秋白文集文學編』第五卷、四〇七頁。ゴーリキーの原文は以下(傍線部のみ):Мешанин-существо, ограниченное тесным кругом издавна выработанных навыков мысли и, в границах этого круга, мысляшее автоматически. Влияния семьи, школы, церкви, «гуманитаной» литературы, влияние всего, что есть «дух законов» и «традиции» буржуазии, соэдает в моэгах мешан нес гожный аппарат, подобный механизму часов.("О МЕЩАНСТВЕ", 《МГОРЬКИЙ СОБРАНИЕ СОЧИНЕНИЙ》, том25, Государственное издательство художественной литературы, Москва, 1953, pp.18.)

(34)"На литературном посту",No.4-5, 1929。

(35)石源華「王明路線在一九三三年對瞿秋白的"批判"」(『復旦學報(社會科學版)』四期、一九八三年)はこの瞿秋白批判を黨內鬪爭と見なしている。

(36)王文强『瞿秋白雜文研究』華東師範大學出版社、一九九八年、二四〇～二四五頁。

(37)陳鐵健によると、批判が擴大する前、瞿秋白は呼び出されて過ちを指摘された時、自分が「左翼日和見主義」であり「革命の情勢を過信しすぎた」と自己批判したため、逆に激しい批判を受けることになったと言う。注六前掲書、四三八頁。

(38)『瞿秋白文集政治理論編』第七卷、六五四～六五六頁。

(39)兩者の合作で筆名「子明」が使われたのはこの一篇のみ。筆名については李允經『魯迅筆名索解』(四川人民出版社、一九八〇年)、一二三～一二四頁を參照。

(40)丁景唐・王保林『魯迅和瞿秋白―合作的雜文及其他』(陝西人民出版社、一九八六年)、一七三～一八一頁を參照。『魯迅日記』一二月一二日の「原稿」が「『兒時』」であることは『魯迅全集』一五卷(人民文學出版社、一九八一年。以下、同版を用い記載を略す)の注も同樣。

(41)一九三三年三～一二月、魯迅のペンネームで『申報・自由談』に掲載された一四篇の合作を指す。この年、二～三月に瞿秋白が魯迅の家へ避難して以來、兩者は頻繁に往來した。「序言」及び一四篇の合作はこの情況で生まれた。この狀況については以下を參考にした。朱正「關於瞿秋白在魯迅家避難的狀況」『魯迅研究動態』一九八五年六期、朱正編注「魯迅著作中的瞿秋白資料」『新文學史料』三輯一九八〇年、楊之華『回憶秋白』人民出版社、一九八四年。

(42)他の合作は、瞿秋白が執筆直後、魯迅に送り、魯迅が數日のうちに黎烈文に送って『申報・自由談』に掲載された。他の一三篇の合作は魯迅

の添削・修正がかなり加えられているが、「『兒時』」は句讀點一つ修正されただけであった。丁景唐・王保林、注四〇前掲書、一八〇頁を參照。魯迅は一月一七日黎烈文宛の手紙に次のように書いている。「『兒時』一類之文，因近來心粗氣浮，頗不易爲；一涉筆，總不免含有芒刺，眞是如何是好。」『魯迅全集』一二、三二四頁。

(43) 丁景唐・王保林、注四〇前掲書、一七五頁。

(44) 瞿秋白の瑞金行きは馮雪峰と張聞天によって決定されたが、兩者の面會は一二月下旬である。馮雪峰は三三年一二月中旬上海を離れ、下旬瑞金に到着後張聞天と會い、その後電報を送ったと回想しており、瞿秋白が瑞金行きの命令を知ったのは一二月中旬以前ではありえない。楊之華は馮雪峰の電報が届いたのが「三三年年末」と記している。包子衍『雪峰年譜』(上海文藝出版社、一九八六年)、六八～六九頁、楊之華『回憶秋白』(注四一前掲書)、一四六頁を參照。

(45) 『瞿秋白文集文學篇』第二卷、九五～九六頁。

(46) 丁景唐・王保林、注四〇前掲書、一七五頁。

(47) 拙稿(注六前掲論文)では、瞿秋白のアイデンティティ希求時における生命意識と時間意識を分析した。「『兒時』」における生命意識も、それを受け繼いだ瞿秋白獨自の意識の表れと思われる。

(48) 劉福勤は「兒時」が子供時代を指すのではないと指摘する。注二前掲書、十～十一頁。

(49) 例えば『俄鄉紀程』では、歴史の流れを自然現象に準え、「無知」から「知」への流れを必然として將來に希望を寄せる文章を書いたり(『瞿秋白文集文學編』第一卷、五八頁)、『赤都心史』「中國之『多餘的人』」(注五前出)では、自分が「理智」の力で感情を强行採決して現實に參與することを述べたりしている。

(50) 『瞿秋白文集文學篇』第六卷、一頁。

(51) 注一四、同。

(52) 大塚博人譯『ゴーリキー選集』一五卷、青木書店、四四頁。原文:「Не рассуждай, не хлопочи,／Безумство ищет, глупость сует,／Дневные раны сном лечи,／А завтра быть тому, что будет.／Живя—умей все пережить:／Печаль, и радость, и тревогу.／Чего желать? О чем тужить?／День пережит—и слава богу…」"ЗАМЕТКИ О МЕЩАНСТВЕ",《М ГОРЬКИЙ СОБРАНИЕ СОЧИНЕНИЙ》, т о м 23 (出版社は注三三同) pp.345-346.

(53) Alexander Kaun,"Maxim Gorky and his Russia",New York,1931. 鄒韜奮譯は三三年五月生活書店から出版。鄒韜奮は魯迅に一冊贈り、その後魯迅は數冊購入して瞿秋白に贈った(時期は不明)。丁景唐・王保林、注四〇前掲書、二四四頁を參照。

(54) 原文「With the suspension of the paper, Gorky's remaining years in Russia were given entirely to the non-political task of rescuing, preserving, and fostering whatever culture values Russia possessed.」(下線部:白井付)。Kaun前掲書、四八一頁。

(55) 『瞿秋白文集文學編』第二卷、一一二頁。

(56) ビャーリク『ゴーリキーの運命』下、新日本出版社、一九七五年、二二七～二二九頁。

(57) 『瞿秋白文集文學編』第二卷、一一三頁。

(58) 『譯文』一卷一號、一九三四年九月。

(59) 原文の「Безумство」には「瘋狂」の意味があるが「無知」の意味は無い。『俄漢大辭典』(商務印書館、一九六三年)を參照。